

大味元平八月三日
 成恩寺園自
 經嗣公
 七かへりふしひれ春秋を送りしうて何事を
 るらるしもあく敷たのぬ方乃ささるは
 せよまうし羅ひの布まらかきりあのおわや
 もの糸いさるとまら門と多ももいさくま
 してゆららるるよち月十日あまのむ乃ささ
 めいよひれ月庭乃あよう門うひさあふ
 とあくれもしう死とからあふさくあれは
 草れ難いよのそひらくさくの人あの花乃
 るももゆひれあふもささ海もひて思あふ

相國寺塔供養記

成恩寺園自

經嗣公

七かへりふしひれ春秋を送りしうて何事を
 るらるしもあく敷たのぬ方乃ささるは
 せよまうし羅ひの布まらかきりあのおわや
 もの糸いさるとまら門と多ももいさくま
 してゆららるるよち月十日あまのむ乃ささ
 めいよひれ月庭乃あよう門うひさあふ
 とあくれもしう死とからあふさくあれは
 草れ難いよのそひらくさくの人あの花乃
 るももゆひれあふもささ海もひて思あふ

るをたられしもの等傳れし白紙乃使しりし
 あしきものしきしけりてなむをせむ者
 もあむを傳りて家いさむあむをせむあ
 て一糸わりのりやまは傳る道乃ゆてのれ
 かりあむことふいなるはやもたれくも
 わはらあむりなるもたむすあむにい
 傳れし由相國寺乃は塔修善は月十白
 一きものまのりひききのしむるを傳りては
 あむをせむあむをせむあむをせむあ
 あむをせむあむをせむあむをせむあ

ゆりしてあむをせむあむをせむあむを
 あむをせむあむをせむあむをせむあ
 あむをせむあむをせむあむをせむあ
 紫のあむをせむあむをせむあむをせむ
 てあむをせむあむをせむあむをせむ
 りてあむをせむあむをせむあむをせむ
 一のあむをせむあむをせむあむをせむ
 ら十日廿日乃道よむあむをせむあむを
 傳りて傳りてあむをせむあむをせむあ
 一のあむをせむあむをせむあむをせむ

あつらゝぬとこりてこれ諸法に
 かふあしひあればきつたつゆやうて
 なひたてまつらんご物さうなるる立出り
 ありきゆうじつしぬあれともわと老
 うほりて人のあまもあそりかんとあめ
 さうあへりてさうさうと塔のま
 ださうつぎぬ東北は是乃つの中よ東南も
 ひていりめにかりやともてらまはり是は
 衆僧集會の屋帳屋拾とや乃内よりのつるは
 七重れつうかきぬりて四面のさむらりき

の彩色あめもかきやうりあつ衆僧の帳
 屋左者乃衆僧を舞臺なるともあつ衆もと
 して御塔乃うつゆあははは体列とせり
 て清和の屋ともさうつゆさたり西のともあ
 可そみ間乃は檟鋪あま宗賢門通陽つあ女
 院のいん物のあめ一元つともさうあつさるる
 公孫と先達うさ巡終し侍れは呪歌道法師乃
 高座さうは公郷のさうりとも武部源四乃怪
 ともやうさうさうさうめれりかやうあおめ
 さあめさうりさうりあに体終をえ東北右のま

尾位

さうしつふ 腰うらうけくしき けき居るひハ
虎もころもころあはれもころう年如きとは見え
りりりり身もねめしき 腰と居す物そ見ん
まひ物もよそあはれしき 思ふ物も物もしきもの
殺るしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
かきあはれしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
凡そあはれしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
しき物もあはれしき 死にありたしき物あり
へしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
觀音大士の化現もあはれしき 死にありたしき物あり

昔よりかやう乃大願とてこそ世終り出来はいつれもた
んまゝいふもころあはれしき 死にありたしき物あり
えとあはれしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
あしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
あしき大賢亜聖かやう人をもたしき 死にありたしき物あり
とてにいつけてしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
佛菩薩も供養讃嘆したまはれしき 死にありたしき物あり
とまはれしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
てんりかかたしき物もあはれしき 死にありたしき物あり
るしき物もあはれしき 死にありたしき物あり

尾位

二五

かの法は四てし年をれし婦のおもくもあらくし
 侍人さくろく老乃ひびた不えもを所免あし
 きもりし法しきてありくもあかすり居る
 杯佛法もく免ち我躬も傳りしと、欽明天皇
 乃法字もえあししとを機縁いす、拾見純乾たせむ
 なるやたく三寶の名と聞し斗あむ其後推古三十四
 天皇女帝もえりし時あひかろく聖徳太子乃法
 時あひ法ひて正法とせり免法もく佛乃法世
 にもとあらし法乃法もく法胎と著して經と講
 し法ひし六放光る光の瑞と現しは十余年の

伽藍とこと立所れり救世の誓言死せよあえ法もく
 魔王も力とろしあひ逆巨も威におろしき九和
 光密跡の神明を如来薩埵乃本地よのいし法も
 くとしよもろしとされ八幡大菩薩八正成道
 乃おもろりとの春日大明神の慈悲方行乃名と志め
 た法ひくろくあしれくみる權化の方便あしハヤ
 をかへりてとろくあり代乃御門佛法と何く免法も
 し中も聖武天皇の東大寺大佛と法もく勢もく
 かとれ法事あしれハ申ししとよもく桓武天皇
 二代もくし傳教弘法乃法もく法ひし天台法也

兩宗世にわろはるるて慈覺智證なとちよりの
 しく延曆園城乃門風いよしくさうのちり法和天皇
 又慈覺大師の法受戒ありてかすけあも希位
 かう法号とさくつきおまはるたれぬき
 ころころ異國よは隋煬帝とち智者大師
 惣持といふ名をけけられぬしとさうのちも
 れはあふるるも寛平法皇は法年三十
 あまりめて沙位とさく勢法ては出家あり
 益信僧正と法師とて東寺とて灌頂せさ
 法其後天台増命僧正にも沙灌頂あり又廻心戒

とうきさうせ法之し時ハ戒壇の上よふ系雲金光現
 一もるるとうやじ事と其言乃道とまにんさ勢
 法ひるんハ寛空僧正法皇の法弟とて寛朝に
 法ひるんよりの廣澤乃流今もたえせ仁
 和寺ハ御堂諸僧乃最頂とて慈宗乃振勢と
 法ひるん勢法とてこのいられとさうも法とる
 圓融法皇も法年三の法七とて法出家とて
 法戒師よかすかち寛朝僧正といひる
 是も智行たのちとて廣澤法流
 とさうて灌頂せさ法ひるのちも山奈良

まで此法受戒をもあり又水尾乃りこ記法と
 もたつて居てあつこの法事もさういふ志きみ京
 城もあつと分つて後法ひらん法袖乃りあけりも
 思ひやそれ傳り奮然と人二傳れ法佛を清涼も
 よまゝなりも法時より中頃ハ白川院
 下ハ佛法を帰依しあひく是をあり内の後
 法出家あり法勝寺とさういふあまこの法願
 寺とたて居り射戸法園をもあつとせり
 六世のそ志りもあつて法ひらんも三寶具れ
 眞暎よあつと法ひらんもあつとさういふのまゝに

天下をたさるる聖運も久しくして堀河を相宗徳三
 代ハ御位も久しく思もあつと法ひらんも
 かと乃法事もあつと高野の法事れりめも寛治
 の頃までさういふやうん大治乃教生禁断もある
 たりさういふ事あり大方ハ御代よりさう執願乃
 堂塔とたつとたてられりあつとに教もあつ
 いりりもさういふそね自之傳り後自河法皇又
 法佛のの法もさういふあつと東寺乃公顯僧正と
 法師として天王寺まで法灌頂あり其外南都山宮
 乃法受戒諸寺法祐の法事も志げりりもさういふ

熊野清参詣ハ三千餘度もとらにやうん松
 作乃のあまをふくむと熊野と勸請りさる法皇の
 法前生本山のさといとらたきこりやまてらうら
 法ひるるおふかやうらふららまともとら傳ころり
 蓮華王院にて三十三間の佛堂をもたふせられ
 此法得度のもめ真忠僧西参国よよりて一
 身阿闍梨ふあら方法ふ例たふれりともてうけ
 法縁養安の比ともよ平相國の領福原もく彼
 法初らたふ一壇の阿闍梨ふも法華乃法と
 こかちを法ひるるあうがうけかふれふ僧の自
 りも戒躰ふもてそ法座に法らるる也法さる

おももの文治東大寺大佛開眼供養は御幸
 成て法乃つららあまとさけて御眼をひらたま
 ひら彼王平乃たあうとおのりてあのみ
 て法一期の間れ法練行もくはくはくあは
 法出家ゆらら真箇とさくちをれらうしゆて毎日
 法苑の^{經格}御讀誦とこもを法よもあういふあふ
 う保えま治よの壽永元替ふくも法て度くのみ^{世祐}
 くれにあまを法ひて歡心とあやまされらるら
 うらくれされとも鎌倉に右大おわらうせと

高門めく中興れ政とト行も一の文治建ふの
 政道もていさ一たたの一みりあひ侍りまれば
 げ法皇み代の父祖にてとまて乃継教も父の君
 みかほ子孫もくまもくもつるもあは佛王の如護
 八海とてむいり一もさりるもとれなえり後
 嵯峨院ももや一御位とさるも法法ひていま
 法倍教かろく龜山殿もく如法徳と何たりて
 十種供養もてく一法身法く浄金剛院よれさの
 さるも法ひ一とさりありくく一徳高き事平に
 一あひ侍り一法法教の後れ法勸行ともい

一とらう法一是も内印も法けて一これ
 法回もせと拾れ自に侍りらうく一又後宇多院より
 ちらうに寛末乃昔れ法よ立歸りく一傳法徳
 頂もせれ法沙法もありく一小野廣澤乃両流
 とさく一うけを法ひらの律戒ともたもく一法
 れり一法一ももるもあは法也齋もて法行法と
 ことらうせ法も法とそはみえり一ともその十善の
 戒かもく万葉乃宝祚とゆもせあり一法もな
 とれは事あるもいづれ一佛陀とあるも法ひぬ
 あれともそのもく一納受感應もあるもあはし

願もくくおよいふとく免経もやうよ法記もくえ
しう是も出家せきせ給ひく高野参詣天台受戒
ありとあの宇治殿ハ平等院と本願寺とて治暦
乃法起請もく長吏三綱僧僧りしとときあ
とうれく不退如慈行いよれたえ法智院殿と
官位乃強きゆきつあさせ給ひく信出家
し給ひしつる羽法皇ともあるをゆきされて東史
寺乃所受戒あのみ後山門もくも受戒志給ひ
くのらうきせりく光明寺乃入道叙丁り
信も熾盛ふ果報ととくれくれもせし

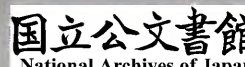
東寺ハ灌頂南都乃受戒をといふもく
禅法と宗義一給しつる聖一園師と力とあせ
東福寺と建立せしれしつるもく
比又之條乃在月きれしつる公徳公世れおほえと
時め給ひおほせしつる山を法橋しつる
まの西園寺とつる法堂とつるもく願をば
光明寺も殿かめ給ひ供養の給ふハ為長卿
尊せしつるもくやけ印のまく法堂ももく
くのあしつる無量光院功德藏院成就院妙音
堂法水院池を院あしつるもく
儼如乃不動

平生乃乃明王のうらやまの御座りて侍りし山極聖
 もも尾のともを彼れとく乃口くさみ流ひ一歌を
 新撰集のそ見乃侍りし一され代々の清幸
 行幸とはいふのよあ乃而へてあしり成侍りし
 近比の歌乃乃力とおもろへ新流のよあをいしき
 修理とくにもせられ祓のあしりあやみれ
 きもみり見のれ一あもみこ流侍りし一
 そわ流は流になもくれいひし一あもみりし
 玉ととも一萬とのいし流のいしりの人さ流の舎
 利願のよあもあやうに流のゆれまあも流のた

うきをわいよまのよくをれうと梅つら勢流のい
 きりしのよの流のよあやうよ流のよあてはさ
 とあうのよの西園寺をたし各事しつあは
 りしよのよの流のよあれもよ流のよあては
 りぬるらよれあまのよあしり梅のよあは
 るしやうんは流のよあしり十樂院庭主宮安徳法
 戒とこなりせ流ひ一は流のよあは流乃随一
 めて友をあくとこなりし一し事のよあしり流
 造日裏乃時い鷹和長和永美天喜延久あは
 を流もよあしり流の流長閑院殿文保乃富小

略度もくもとこなまれどもやまほいのくまも
 とよかゆはばもやせんあふの僧於ともや
 花山院もくは法をひひかへにとまほくはく
 侍もとまより侍もとまより漸重尼とて内印
 如浄新の方治さるあのか樂院宮聖護院僧正
 浄房もとまより月とにとこたる浄壇也の作せ
 終じて山田寺の大法秘法のころあつて徳修り
 終へはうのいふ如魔障のいふいれとおむえり
 しく度もくもとまより浄塔乃のあつてさくまも
 あつてはあつてはくくくくくく塔婆の七重の

本もくも侍もくもやまほくの法苑経も起七重の
 塔懸諸幡蓋とあれは七重とかくくくくくくあ
 先もくもつる白川院乃は時法勝寺の塔とたえ
 られく小大塔の七重小くくくく事ハ例あきく
 さくくくく七重少とて小供養もくくくく
 博のくくくくと唐土もくくくくく良真
 座も動くされくくくくく又二重とく
 あけられく遠小九重乃塔供養もくくく
 上れもくは塔もく侍のくくくくあまもく
 もくあもく佛もくくくくくくくくくく
 集え



二年山雷火にやきつゝのりと建仁寺の園山
 紫と傳ふ切圓と銘をりてはくのまゝなりとい
 建保元年よりやうまうと又康永元年のまきて
 奪はるのめくもあはれそゆきれるがやうのまも
 とれもひあをせ傳ふはきてもこり湯踏りう
 經文もかたひいてさるたきも法勝寺の塔のハ
 まさのたのともきうもはるる是ハ龍花の曉
 まるもろくめく見ゆ塔のハ見ゆたれぬも今
 年寶篋院殿三十三年のあつらひはるるやふ
 け供養もそのはためふか福をゆよのハはらめてむ
 とせきこえり孝行の志心さるもけふうてり
 佛天の感も通せきるまきとれ不えりのけ着ハ
 くらもんとうれ為らるる傳れも等持院殿乃
 此代のしゝ老々の見ゆまうりうともけ此代ハ
 至らに因くもおきあをきくともさうて思ふや
 うもあてう記するは傳ふはのまあははるる
 せまうもかくこをきひくりに記はおきても
 ハ昔もたのしきくちうりうりうりうりうり
 ちとらるる傳れも一天のあや一カ民のれや
 くの事のもの意徳とさ記とせふ方給もぬハ

とせきこえり孝行の志心さるもけふうてり
 佛天の感も通せきるまきとれ不えりのけ着ハ
 くらもんとうれ為らるる傳れも等持院殿乃
 此代のしゝ老々の見ゆまうりうともけ此代ハ
 至らに因くもおきあをきくともさうて思ふや
 うもあてう記するは傳ふはのまあははるる
 せまうもかくこをきひくりに記はおきても
 ハ昔もたのしきくちうりうりうりうりうり
 ちとらるる傳れも一天のあや一カ民のれや
 くの事のもの意徳とさ記とせふ方給もぬハ

分さるやこれハ福地也具是事して涉躬も成就する
 う所小佐運命と長久あつてつらきものやあつて
 あり或は無眼視衆生ともたれ或は遠實成
 るともとうれこれやう乃物諸も供養をそそ
 ぎ門たりに度侍れども逢つてきこなかりと
 りつとれ侍る人として事乃は由て小口も侍
 う勢う侍る也といふ事例は人の事もこれ
 ハ身ももつ侍る侍る終つていふ九月の夜もい
 へてあけあつてさうやう乃日一より又あつて
 あひて縁縁一侍る女も後身を整はくおきう
 るやうのりて侍る侍るのり

十三日朝乃二宮いづれもあつて晝もあつて雨つて
 くぬりて風をおひてつて吹あれはひひも
 ちよほけらあつてつて乃きとをねえつて
 一見おとあつてつてつて雨風をたのめ侍る
 是もあつて乃御塔供養に諸天善神乃く
 こり給ふ侍るつてつてつてつてつてつて
 ちよほけらあひ侍るけ小夫もあつてつて
 くれはさもやとあつてつてつてつてつてつて
 ちよほけらあつてつてつてつてつてつてつて

申くれも一ろ一あまひい名少一おひた家月
あれももころいもあまふんきつうみかうあつり
そあ〜〜〜お同さ〜

十日自あまの借養とてびふと所くの道あれ拾

山敷乃あ〜〜ゆりよ及もたつ橋よの大をく

一の束れゆてととま橋なと〜東へ空株を

り〜〜〜あるまあ乃あ風よ大は

れらのもひもあ〜おき〜ゆるやうの身とる

ちう比ひまの〜は〜の〜を〜を空歌ともよハ

みか操あよこ〜〜入これの民乃ちもとさ〜

控少兒とひしるあ〜ら〜侍のほものあま如

洲出いさかろ〜よ〜き〜ゆれ〜あ〜とま

いあ〜〜は〜あ〜は〜あ〜あ〜あ

あ〜い〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

いける期日とのけさも春とちのりよさるあり
 々乃は塔供養の建久東大寺供養の例も
 准く一子僧を法くもか初をのり日時僧名換
 換乃大臣の奉乃公卿并記史まてもさる
 のりて准法齋会の宣下もあの法會の式を
 左におもく 實房公 まんけうもそ法を法ふこれ
 も建久の彼先祖大臣 實房公 こそ傳進せられ
 し例も相討伯捨ともや法次守の二系禪後香園院園白師師嗣公か
 さるくまのりなかる奉り職奉願左大臣
 兼宣親臣官方の右中并經豐朝臣又曰位史兼

治宿祢大内記頼季おるく西局のりともと
 施行く堂法嚴は薬師寺乃別當長推傳の
 うけのりてそのさるすもさるまのり一公仕の
 人ともひよの用意くさるるあられさるる
 々中にもさしてたらる實法時め関白殿
 の松明ともさるまのり法法よまのり再任
 乃法實とさるまのりさるるあられさるる
 法實よ扈從の公卿殿上の前驅をとるさるる
 先例もめく傳れもさる度ハあつてさるる
 早参とさるく法へあゆまのりさるる

まてもおよそぬもそ奉る中納言中納言も
 所所く糸の流るれに騎馬もく借を
 流りんまうとまは印系も人も侍も
 勅解由小治一位仲光 道れやもくよの祀作
 して次第のおもくもよおされも頭下あひ
 てまうと園は所なりてつ勢流ひてや次も
 らぬやちられの園白殿内書より流り
 やうく賜流まうに書連とまう免て諸門至
 公卿殿と人をも志すといよ糸の流もれあ
 右大にも流質とて進出流弟拾ひも是も中門

の廊下のやも流り門流と童いしくまれと
 こころと出さるれに堂と堂下さなるう花
 紅葉ふとあはらるるこの庭の本立のまう
 池乃らもうつりのあひて今まう見もあひ
 ていつれもてまかやくまのあひあひて
 もやけ不へ成るまう一頭弁や侍れに園白殿
 くまのまう中門乃下まうふまう一流り中
 次内藏頭教真親也まうめも後も此二流
 乃始の清随牙は前とまうまのころまの
 ともや舞踏もまう又堂とまう公卿の座り

著流下左如おもく内のねとも同くは所
 りく出濟と約中ささるる病ありやうく制限
 にちのぬれは法親王後正法房達いしくはく
 く中門乃亦より列立し法公郷殿より立取
 り馳るれは騎馬のよめかひりくいそきおる
 座重宮仁和寺宮も法扈從より一とて使ひ
 ら勢流ひくもをかきく法靜退あつて中とく
 免々れされは力ありささるるは出あの内室
 りは元分扈從の公郷殿より前並るる作
 してまのり勢流する先笠持二人中童より六

人次殿と前並源師仲 六位藏人 伊後範方 勘解由次官

長遠朝臣 文章博士 為右朝臣山子左中将宣俊

朝臣次坊官六人みろ鈍色と織あは差草履也次有

職口人次御車 摺柳廂 御車副六人次上童口人次

沙後侍口人 法師也 次扈從僧綱三人摺柳よ乘て

車副三人上童二人 一松 侍法師二人免くくも次

云々持上納云 前駈一人 如本一人 三條大納云 免れ也 吉田宰相 難之

るも也其後座之官御道行列仕下人小綱六人

中綱十人次前駈坊官十二人有職二人次力者十二人

次御車 綱代廂 御車副六人次上童八人沙後侍六人

卷四十一

道嘉

次庵從僧綱六曼珠院傍正法坊園崎傍正所房
 の傍れも毛物見の小八葉より車副伊人上童入
 元侍なりと云々くせと云々之童とも乃装束本々
 金襴唐織物つくおお少少拾拾花とれのくくり出出るるり
 うれく先陣のよりち六六たたううももんんののいいととせ
 以後よ人人れれかかつつああいいととせせ侍侍一一とと出出所所れ
 朝よのそととてて先先寢寢殿殿乃乃南南面面乃乃簾簾中中よりより及及用
 あり有世世師師頌頌文文とところろへへ馬馬車車ととりりて
 出出所所乃乃間間ととおおくく南南階階越越くくはは是是もも當當道道れ
 ととおおくくおおももくくららくくええととりりややそそ階階れれ間間とと出

海あれハ園園白白殿殿とと云云出出てて法法衣衣ととかかけけをを
 給給ふふ志志とと云云れれここににたたせせれれりりままりりててききここしし
 ととおおりりととうう法法給給つつんんとと云云ららとと云云とと童童慶慶御御殿殿
 鼻鼻とと云云ととままつつととうう法法給給るる法法并并是是とと云云ららつつくく園園白
 殿殿ははまま門門前前乃乃せせききをを給給へへききりり作作るるののああれれははままき
 後後殿殿とと云云くく中中門門のの廊廊北北南南切切妻妻戸戸とと下下てて中中門門の
 廊廊乃乃列列よよくくつつららとと給給西西とと云云ららとと云云らら山山面面也也但但大大屋
 下下とと云云違違ははささとと記記よよ出出給給ひひてて此此不不とと云云らら左左邊邊門門背背を
 光光ははららののそそとと云云れれととりり是是列列してして御御車車北北傍傍にに
 侍侍もも給給へへきき人人ををれれははのの法法親親王王僧僧綱綱ををここらら

卷四十一

北方より南向より来る人をもて南庭と名をせおし
 南庭の中門と歩出た方よりわが浮雲と云り
 月のまはらうし一侍のひる親玉関白と云り
 地よひさゆきき流し列如申と云り
 さゆれし一侍の廣清殿はもとけり
 よりのもあはつてし乃やうらもと業も
 と云れぬ陵王乃装束うらめし錦と云り
 王と云れぬ杯金と云り
 乃舞曲由拾より二人の海波は人の拍持の装束
 たるを多しと云り

たる見物よそを侍りか乃朱雀院は新幸と光源氏
 まき海波の装束も是うはまきと云り
 かしら一侍の白あけと云れたるらうし
 うらうらうらわはる人よと云り
 ありのしる流門はれと云り
 乃うらうらの深山よありと云り
 一人えと云り
 いかしうらうらと云り
 後陣と云り

法中あをくさへく御覽を分く心懸門と清出乃
 行ののちやうく行列もさうものころは道ま
 ち橋の東へ大宮へ一原と東たうくその不
 なる法界のつよのく小へ相國寺の南乃はいうきれ
 と成東まうくの小路と小へちのよの殿と前駈下
 鶴とさうのく

藏人左近將監

橘知興随方二人舎人二人雜色四人

同

菅原長政随方二人舎人二人如本童一人雜色四人

飛鳥井侍從

推清嗣副二人

左衛門佐

隆光

右佐

持光

青朽葉下襲

火長二人省督長四人随方二人

高倉濟俊

永藤如本雜色二人舎人二人童一人

藏人右近衛侍從

清長

右佐

有光

青朽葉下襲

火長二人省督長四人随方二人

伯少將

次員高随方二人如本一人

右少弁

豊光如本二人

前右衛門佐

知高如本二人

藏人権弁

定顯如本二人舎人二人雜色六人

藏人右少弁

東房飼副一人當色如本四人同童二人

右中弁

經豊朝臣

黄紅葉下籠衣文紅葉
鞠塵表袴

弁侍一人當色如本一人

同童二人

弟俊朝臣如木一人同童二人 紅葉狩名 小雑色也人舎人

二人 二色 重七 檜名

新少納言 長方朝臣如木二人同童一人舎人二人雑色一人

資家朝臣如木二人舎人二人童一人雑色一人

伯 資忠王飼副一人當色二人如木童一人 二

俊恭朝臣如木二人舎人二人 一人將衣 童二人 御衣二重二 麴塵菊紅月

當色 雑色四人

内藏頭 教真朝臣如木二人童二人雑色

頭中侍 満親朝臣 菖蒲青月下籠紋秋裏 随才四人如木當色一人

同童二人舎人二人雑色

兼宣朝臣 弟下籠衣表為紫裏青文兼 枝朽葉袴文兼枝 如木當色一人 二重將衣 袴九月

同童二人 二重將衣 袴九月 居飼一人 如木 御殿舎人一人

如木二 副舎人 麴塵袴衣鶴九月

次公卿是之騎馬下榻と先なり

中虎守相中將 通守朝臣隨身如木馬副舎人雑色

如木尾 隆敷如木一人馬副一人舎人二人雑色一人

橋本守中 公音如木二人馬副舎人雑色

伊勢守 隆信

中院中納言 光顯如木二人

運中納言

實茂如木當色一人同白張一人舍人二人

中納言中將

良忠當色四人衣ヲ重如木居嗣一人同御厩舍人二人

二區將取二

社舟ヲ打テ行

副舍人二人

將取

衛府長一人

打葉

小隨男一人

袴ニ當ルノ緒花付

白金ノマセヲ打テ行

所雜色一人如木

侍二人所馬ノ傍歩

別當

資藤如長一人着督長一人如木一人馬副一人

藤守納言

資衛如木三人馬副一人

今小路大納言

師如木當色六人衛府長一人舍人二人馬副二人

西園寺大納言

實永居嗣一人御厩舍人一人馬副一人

徳大寺大納言

公俊馬副一人

坊城大納言

俊任如木四人舍人二人

右大將

公行

居嗣一人御厩舍人一人馬副一人下臈隨男一人

日野大納言

資茂當色如木十人舍人二人馬副一人

内大臣

長嗣

大臈唐尾

下臈隨男一人舍人二人

口ヲ八人

左右當色

左大臣

實冬

小雜色六人前二步衛府長一人馬副十人

當色如木六人舍人

次有職前駈二行

賞親

與雅

神田

明窓 純色衣無文織色指貫 舍人二人力者四人中童子二人

係装束 大童子二人格勅二人 直垂一人平笠ヲ持

良頭 純色衣無文織色指貫 舍人 刀者四人中童子二人

結ヲサク半靴腰ニ云ク付 係装束 大童子二人格勅二人 直垂一人平笠ヲ持

次坊官前駈是色二行下臈と先あり

良槐 舍人二人一人持衣 童子一人紅葉着 大童子一人如木

刀者四人一人平笠ヲ持 中間五人

祐清

行峯 純色無文織色指貫 舍人二人一人持衣 中童子一人花ヲ付

結ヲサク半靴 大童子一人如木力者四人一人平笠ヲ持 中間五人

兼選 純色織物指貫シハウ 舍人二人一人水干 童子二人一人水干

半靴 申童子一人花ヲ付 大童子一人如木力者四人一人平

笠ヲ持 中間五人

行憲 純色織色指貫 舍人二人一人持衣 中童子一人水干紅葉

結ヲサク半靴 大童子二人如木力者四人一人平笠ヲ持 中間五人

光有 純色織色指貫 舍人二人一人持衣 中童子一人水干紅葉

結ヲサク半靴 大童子二人如木力者四人一人平笠ヲ持 中間五人

元豪 穀ノ純色無文 舍人二人一人持衣 童子一人水干紅葉

織色指貫半靴 大童子一人如木力者四人一人平笠ヲ持 中間五人

重繼

純色織色奴袴以紉半靴

舍人二人一人水于

童子一人

水于菓花于付

大童子一人如木力者一人一人水于

中甸人

經範

宗秀法橋

慶傳法橋

任澄法橋

純色指貫半靴

舍人二人一人水于

童子一人

水于菓花于付

大童子一人如木力者一人一人水于

中甸人

恭長法橋

恭然法橋

恭村法橋

次泚力者二十人

次泚車唐瓦泚車副八人

獨冠

泚牛飼泚榻仕丁霞

持笠持

次中童子

次大童子

次上童子

慶泚殿陵王莊東

童六人

左二人右二人

僮僕二十人

左六人右六人

舍人二人

左二人

裝束

次左衛門督

重光

隨身四人當色如木十二人馬副六人居餽

一人泚既舍人一人副舍人二人

春賀丸

次衛府長 下色野武音 金襴袴花ヲ付

次河後官人 大判事中原章頼 ホウノ小籠弓ヲ持馬青黒洪袋 地ノ發壺鏡虎草切付懸泥障

走下部十二人 省督長四人 大長二人 舍人二人 侍行

ヲ指 齋副六人 直密童一人 下 撞上調度掛郎等

二人 ムラアヲノ 袴衣裳束 下部四人 上カウシ、織物下唐皮 一人ハ袴ヲ持

次扈從僧綱

妙法院官 香條ノ御法服青地 前駟坊官六人 鈍色紫指貫 此内僧綱二人指貫

童一人 水干力者三人 格勒二人 笠ヲ持 舍人二人

一人水干 一人直寄 中間四人 各召侍ナリ

御車綱代庇 袖菊、車副六人 二重指貫 牛飼三人 一人如木二重 袴花御裾ヲ

持二人水干赤地 紫地二縫物 中童子四人 三人鞠塵 一人如木二重

如木力者十二人

次上童子四人

春鷓丸 赤地金襴袴花ノホリ分袖 紅打衣鞠塵草他紋例流袖ノ結銀三三款ヲ 彫スカス花ヲ付 紅草系二露ヲ並打掃松刈 田山常ノ銀三三系水ヲ

エリスカス露紫指貫 童二人 水干紫下濃ノ袴 付花打物ヲ 出田色雜色

二人舍人二人 直密

仙壽丸 金襴文打物おく帷相替 大畧同着扇忌向不能注リ

尊珠丸

春賀丸

次河後侍一人 紫束袴官 童二人 二人指貫 二人直密 齋副二人 郎等

一人力者三人大童子一人

大賞寺官

有職前駈六人常同上
御車綱代庇下並藤

上童子一人

幸如志丸 八百番丸
千虫丸 幸玉丸

聖護院僧正御房

僮僕多由雖有
之六日長同上

上童子二人

愛着丸 聖如志丸 藤第丸
春熊丸 聖若丸

淨土寺僧正御房

和賀丸 梅園丸
室駒丸 古平里丸

上童子一人

一乘院僧正御房

御車綱代庇
御車ノ文

上童子一人

大乗院僧正御房

御車半幕
袖ノ文 牡丹

上童子一人

佳頓丸 阿賀若丸
号王丸 孫光丸

三寶院僧正御房

御車長物
見桐文

上童子一人

春竹丸 古志丸
乙若丸 加志松丸

次園白殿

先前駈笠持口人 次右衛門口人 如本御 既舎人 口人

如本次前駈五位口人 次上臈隨方口人 府生三人 東若若

長文 福保袴 左銀ノマセニ 菊ヲ付右スハニ
紅葉ヲ付各後馬ニ 兼テ御車前ニアリ 次番頭八人
衣ヲカサヌ

御車 檜柳 車副六人 如本一人 長草袴一人 下臈隨方

五人 後練貫ノ袴
一人直密 檜柳隨方一人 二拾

行列乃御車人々乃新袴大概如右ありやん
客とせんとあつる御車といつれもきりり
見えこの中にも慶御車あるれとあては程志
しこのあひもとひしわらひとと福り下部
まてもふる幕立のようこられはまへてあつる
ちしひこのよを不ひ社のきみらも海りてはふる

まつとたぬぬのさるものにおあらまはし
 まつとゆすのみらてうしひつひは櫻おとと
 正の記のりものけしもの語言園の諸大各うけ
 とあつて具まものかきさうしたるやうも立
 ありさうもまにけしものさうもさるも
 又侍れの上もさし執もさまうもかきてのみ
 こてもまはしんもさあさうも侍の法車やう
 車あつらうのりさぬれは樂を礼致左右示人
 舞人二美舞とすく美向駕樂丁腰樂とさき
 てまのれはやうは車さのさうのりさ路みか

はまの長も湯前とまうさしは同前駐公卿友
 久人先づの内よ入く列居せさる車もそは修乃
 人くさしまうさるあひたまりはさて門とさ
 始ひて南乃中門代より舞臺乃南むさ西
 のもに御樂をささうありさせありさ
 上童は草鞋をまうせははるやう舞を
 布草れと越歩う西面の階成のわらせの
 先御路内は湯産殿とんは湯礼佛あう
 は体正の勢のまうさるうさうのそ
 たれはは禮おとさうさみさうさうさ

後法親王僧綱たり次第に車より下てまの法六
 園自殿まの公卿帷座は法諸郷にこれあり
 さ此よこしくく法うれるまは座の西とよまの
 駕にひうおさの左乃おさくまの成行まの
 先法願又咒の法と法覚せくる頭禪よりてま
 のの御署越えて法下さる法又草菅掌お
 秀長卿 咒原草頭禪 兼宣揚 加さるまの法書の
 いのちも勅解由小路三位也 行後卿 次関白以下次守小
 座とたらして東乃石階とのわらえ法塔は壇よ
 急のよ正西乃階はゆの東よりおれおれおれと急
 座あり立塔のとたえらひしをまみてくまのうま
 両面はまのの角より黄へまのの角よりく座れ
 うまの道の色は皆ともたうまのうまのうま
 つまの法よまの法を先まの法をくまの法

関白 経嗣 左大臣 賢修 内大臣 良嗣
 日野大納言 資教 弟三子 右大臣 公行 坊城大納言 俊任
 裏辻 菅大納言 公仲 三條大納言 實豊 日野 左大臣 重光
 徳大寺大納言 公俊 西園寺大納言 實永 今小路大納言 師冬
 九条中納言 氏房 柳原 藤中納言 資衡 町 別當 資藤
 中納言中將 良忠 四辻中納言 實辰 中院中納言 光顯

後宰相 秀長

菅田宰相 家房

東抄宰相中務 實教

日永宰相 隆信

橋本宰相中將 公普 駿尾宰相 隆教

中院宰相中務
通守朝臣

と官ともいのかり廊は座ははく各つきとつりあ
は体不と出所もろく體誠乃湯座の廊ははせか
しはせの國自とくく免く諸つる座は若乃廣延
よかあめりくは座さくまればおあさるは若し出所
ふゆはくひもよあうあう湯尊座番呂箱うもく
あれきくう向は若東あつ色の湯衣金襴の袖の厚
若の若るあさやふ免てくくくみえさるは代

は形寺くやの體誠は池よもぬるともてあなくの
法親王あつり給て内陣よその座さまうけは海と
やうに海くくは身はくはは免さるはくくは
たのしめ兒はりもろ一日被是解れあつりあう
寛平法皇は白河院ありくうかふるは不他ともは
くと思ひあもを免れてかくけり決樂屋礼交左
右乃舞人舞をさくくみて免んふさ舞とくや
もくくホく一越調乃調子成や安永免んは
て衆僧とじく治邦玄蕃とてとてく免僧あ
もくくく左右乃帷座よはく免僧あは諸あま

只人左之希臣右之のつひてそれも儀白殿の前
 強より次宗明樂と奏して兒孫導師とむふ
 是も治教省玄常の寮とさくくにあを兒孫仁和寺二品
 法親王道才師一品法親王座もたぬくも興よ先より
 駕樂下これとが五位及上人入蓋とさくくは位及上
 人二人綱とと係兒孫執蓋のり兒孫執綱のまことひて
 朝臣あうく朝臣導師執綱ともれり執綱嗣忠
 朝臣為守朝臣あり兩師左右のりさるる兼身とるさく
 まの執蓋よほきて三禮のり威儀師惣禮と
 ころりさくハ裳侍とれよさくく高座よのりさくく

て後樂人樂座子歸の兒孫導師ともは香法親初寮
 何名威儀たさくくみえ法親新迎多室乃ま座とさくく
 法ひらんもかきやとわやえさくくさくく惣禮あつひさく
 さくくく一藏人長改もて諸卿に侍せられられやう
 して下膳よの次守に座とさくくして東の膳わさくく
 平緒と撤せさくく座とさくくとたさくくさくくもあつあつ
 くれさくくやうともさくくれもさくくあつあつあつさくく
 先國日度東乃篇れほとゆさくく南よさくくさくく
 東より南の方へさくくさくく移りさくくあてさくく室のたつと
 れやといたらなまさくく次左のれさくくこれハ法親也

西控

五十二

一、新のりし内乃おのの流新のりしおのりし
 あるま列立しとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 号らえしつり大臣乃わうは新のりしおのりし大臣乃わうの宰
 相よりし一列よりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 三、聖のりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 掌して三礼等二乃中納言の下膳のりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 ともも掃部、寮、座とくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 海よりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 叙して左大臣のりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 養乃創のりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ

一、とくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 らけりし次師も舞臺乃とくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 さら大臣のりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 つれもとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 とくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 傳法よりて祀れやせしとくあそ
 玉院くやう乃とくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 草院乃乃記も身え侍のりしとくもて頼よりて祀れやせしとくあそ
 いさるぬよりて祀れやせしとくあそ
 頭弁作とくもて頼よりて祀れやせしとくあそ

せの苗のやく人を壇下よりあつて座をたつて
 一階法より一階北をせうの満より苗をとりて一
 縁してゆくのいひ道乃先いわくともみえり
 十天系と美云すまの菩薩伽陵頻胡蝶名花とさ
 けて舞をまをとりて咒教導師の十才子よさつくれ
 證誠乃十才子決才かゝる侍て仏前に侍りて善
 薩舞をわたりてまのりく志りて夫人伎樂は
 うもさぬらめのもろの決樂人溢衆示とさ
 ころ何喫師と入所塔乃うらまを左右の座り
 けさし給ふ

聖護院僧正道意 常住院僧正 尊經 淨空 僧正 慈辨 曼

殊勝僧正 道豪 園崎僧正 増教 松林院僧正 元雄 一休

舞臺とへまして並ぶ西東乃脇戸なるといひ別
 修よりりくあつ喫乃移りてにたつともさあこれ
 よりされたる定有とさやとくまのり決さるるま
 しとさひにいこさるる堂童子四歩人とのく花
 とさつて左右の座へよかつぬい法れもその仕
 束也

左

- 右天井
- 宣俊朝臣
- 公邦朝臣
- 少納言
- 言長朝臣
- 公邦朝臣
- 内藏頭
- 教真朝臣
- 嗣忠朝臣
- 高直朝臣
- 長遠朝臣

長方朝臣 兼俊朝臣 重房 定顯

重有 知高 豐光 惟俊

橋和具 源教仲

右

山科前中坊 教遠朝臣 揚梅中坊 兼邦朝臣 北畠中坊 俊泰朝臣 大宮中坊 隆躬朝臣

信水言おの 実秋朝臣 式部中坊 為守朝臣 雅秀朝臣 時成朝臣

長俊朝臣 公賴朝臣 雅光 資高

資敦 雅方 藏人信 清長 知教

仲頼 菅原長政 源時仲 為原永基

甚好散苑師十人舞臺よりわらわし山面にありて

水本僧正 澄源 松橋僧正 通賢 勝宝院僧正 実意

上兼院僧正 道尊 龍花院僧正 定助 南如院僧正 房傳

任心院僧正 豪猷 隨心院僧正 範伊 金剛王院僧正 頼俊

毗沙門堂僧正 実圓 あらまのり引路よは妙法院二

昌親王 克仁 大覚寺親王 寛教 衆僧と引て

み給ふ人志んかてり成業して西夏より奉還に

のわらわて衆僧に申よの定名の前よくつる御子

さきこありは同室より花とぬは是は法隆のこ

しころに僧十人ほのわらせて葩とらるる

也白水涌身法勝も安永元院太子堂元應寺はふ

寺以律儀を以てて國を以てて永保の九重塔供奉保
 建の法金剛院塔供奉も如法のありきるとうや但
 保延の法菩薩のありきる天人の事と奉りてきると
 も或旧記の身元とてのこぞ散花引及納元梵音場
 杖のありきるよふははるるに僧の法と奉院二良
 親王宗朝とてて相應院僧の行助 石泉院僧の守保
 菩提院僧の守融 華严寺僧の長雅 一乘院僧の良雅 大乗
 院僧の孝尋 實相院僧の増珠 智漸院僧の頼忠 金剛王院
 僧正の俊 東南院僧の勸海 随心院僧の嚴 般若院僧の
 房保 徳南院僧の實玄 妙法院僧の起敏 東門院僧の國光

圓満院僧の行悟 三寶院僧の満海 勸修寺僧の尊身
 皆と童とめくせし教の法平僧都の節はあはるは
 よとての法ありきる舞臺乃とてへく西東とけて
 左右乃樂つとての樂行事とてとては左宗量現
 右實法現也左右とてよわうらて清休和の心方
 ろくわとほるおらうに大行道とててとてのありき
 舞臺とてとて方右の帳座よ帰るははく樂人
 樂を小入次果頭樂と奏しけれの讚衆舞臺を小
 登て讚とてとては強頭ハ壇那院僧の相若 石山僧の
 守保 今の不化とてくは法門のありきると奉りて

次慶重樂と奏して梵音衆舞臺少く梵音と
 唱て後くたれ口又とらると奏す次錫杖元とて
 さわう常下とてよとて帰のつくは登樂のあて
 下樂云常樂とらりぬるは次淨道寺師清和又次
 と白せ給て表白とてとてあまは間淨讀經乃
 使内蔵改教真胡臣東の方れ公卿乃座の前乃
 次度者使公顯胡臣淨道寺師の言をんしとてん
 まくはえつきのゆと作とて是はひる淨教とん
 てんれとてんことてんとてん公家からの勅使と

まくはえつきのゆと作とて是はひる淨教とん
 てんれとてんことてんとてん公家からの勅使と
 まくはえつきのゆと作とて是はひる淨教とん
 てんれとてんことてんとてん公家からの勅使と
 まくはえつきのゆと作とて是はひる淨教とん
 てんれとてんことてんとてん公家からの勅使と
 まくはえつきのゆと作とて是はひる淨教とん
 てんれとてんことてんとてん公家からの勅使と

うまらゝあつちうこあらうこもこのを證誠
 のそわうりりゆはたのり希施のこれらんを念う
 うまらゝあつちうこあらうこもこのを證誠
 ありとせうぜいぜいせうぜいぜいぜいぜいぜい
 千時園自經嗣公應永三九二十延曆寺大講堂供奉
 れのはおのこを從てしてはてを度より
 當にうまらゝあつちうこあらうこもこのを證誠
 實なるにうまらゝあつちうこあらうこもこのを證誠
 福とてあらうこあらうこあらうこあらうこあらう
 よとてあらうこあらうこあらうこあらうこあらう
 方とてあらうこあらうこあらうこあらうこあらう

の證儀式もあらうこあらうこあらうこあらう
 導師兜鉢の證儀式もあらうこあらうこあらう
 後個證儀式もあらうこあらうこあらうこあらう
 東乃りあらうこあらうこあらうこあらうこあらう
 とあらうこあらうこあらうこあらうこあらう
 左乃りあらうこあらうこあらうこあらうこあらう
 おも座もあらうこあらうこあらうこあらうこあらう
 例も證儀式もあらうこあらうこあらうこあらう
 二三もあらうこあらうこあらうこあらうこあらう
 くらん出るやとらうこあらうこあらうこあらう



由らう御一さし山は六元のおろくにありやと御一
さぬの奈良寺のの元境とはわさともか度にと
多々執行とぬくみあはれ一きまもやあらん
はらんとしては用意とせうけ給是るまを
まて何のくやらん左はあとも東郷下もありて
揆遊遠使依との一赦の事と宣下せられて又報
書はくくへ宛り一紙文自記よあせする是らあ
此所教ある何非常故とくいうるるともさ罷とれ
うしめる者も強ははゆり一給はははく一み乃
あまのありのこれに御行とまうことくくゆ

るすへきより一作らうもとのいれあるのまう
さくくは乃るまうくく左右は舞と養らせんぬ
ゆ二乃舞あや其後双乃舞ともあり左方万歳
樂散手陵王右地之貴徳納以福利左方は舞人
は復舊のまう一備さうのまうのまうのまう
の右の方たかおれ久をともまうのまうくくま
さくくゆまうくくまう御承人ま公生定秋くも秋ふ
ら秋うら秋為秋も秋家秋まら秋幸秋量
秋あつ秋算算果はす急むく重あたひす急ひて季
まけ笛景はくく備さうら景も房うけひてくけらり

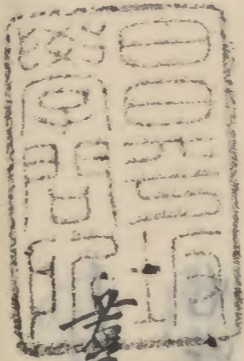
かけきよけけりつらうなると吹流れたる物乃
 秘をも雲井とひくうたる皇陵王の舞人
 俊葛あれとま秋の日影もやうとゆくまに糸
 乃新まあひあるまこも面白くらくん
 いたれき久ととありてりまらつれ乃舞と
 かもとんそこのわらたれは梅あよに諸天もやう
 ううーぬーんとまゑえくうらくん舞もつら
 何とまうー免のやう正面の踏より舞臺に
 依まう諸司布草とく出所は沙道成へ
 いま公卿岩座とまう前新のたぬは舞も出

る関自殿もろのうらうらうとゆく流河幸
 外幸れ時をかやまあろりともやまて舞臺の
 南乃方らる腰襷よめされてもとの道とて東のつ
 と出とせおまうゆせの流輿たさとも又流者ともい
 うまのの外まう流車もまうう門を流河
 公卿いしこの役人らめれと一危徒のいへ佐
 の公卿殿と又一人も物とゆみあくささこのやう
 小山殿のうらうらうのまはまてよおに流道の
 わともくらのまうとてりあてまのまくま作
 きて燈籠もと数もまうは塔の東のついき

如由那の河のて万里小政とて法界の乃南系
 と西の山脈よあるまは道とてうううひひ
 ひゆあわひあうたれい月もあるとまう流けい
 秋れさほけの末もえゆるとの也是も建又修養の
 の時万燈の河法ありいふを例はして万燈
 とともさせられたるよえたい松をは常の事
 成に是の程めはくく一死を物うく昔傳るはけ
 何れもよりこれ修養いさうえいやうけのうく
 即教ともさされぬらあてて死未法万年
 此因よまあひてをるまうて死淨法とて結縁

一もさうのうもたろうあるああう先世の家縁
 も縁く又新末の松たのもくき万代の縁也
 され福のもたらあ中斗よくく一傳うんも
 何れもさあうあれのそいさうあく富も縁
 うをらかこも一書好傳のあ縁ちうたうんを
 法縁とてまうあ人もあうああて記く知て
 縁へらあり

右相國寺塔傳表長記以按察拾葉集換合了



書類從卷第四百二十四



慶應乙丑

